

平成30年度第2回生物多様性保全検討部会

【 摘 録 】

日 時：平成31年1月24日（木） 10:00～12:00

場 所：職員会館かもがわ 2階 「中会議室」

出席者：湯本部長、板倉委員、菊池委員、原口委員、久山委員、森本委員

議 題：(1) 平成30年度第1回生物多様性保全検討部会での議論に対する対応状況等について
(2) 京都市生物多様性プランの取組状況等について
(3) その他

<開 会>

中村環境技術担当部長からあいさつ

議題(1) 平成30年度第1回生物多様性保全検討部会での議論に対する対応状況等について

湯本部長 前回の部会での指摘事項及び検討状況について、事務局から報告をお願いします。

事 務 局 < 資料3に基づき報告 >

湯本部長 以上、事務局からの報告に対して、何か意見はあるか。
意見はないようなので、次の議論に進むがよいか。

(一同了承)

議題(2) 京都市生物多様性プランの取組状況等について

湯本部長 プランに係るリーディング事業の取組状況について、事務局から説明をお願いします。

事 務 局 < 資料4及び資料5に基づき説明 >

森 本 委 員 昨年の11月に開催した生物多様性セミナーにおいて、基調講演していただいた京都高低差崖会の梅林氏に、生物多様性と地形に関して、大きなスケールでの見方と、段差などのミクロな話と関係づけて講演していただくなど、個人的にも非常に勉強になる良いセミナーだった。生物多様性の理解を深めるためには、SNSに加え、セミナーのような色々な人に参加してもらえような工夫をすることが重要であると考えている。
また、今後、生物多様性を進めるに当たり、重要な視点は「食」であると考えている。和食が世界遺産になっているが、食の関係者は、その資源はどこから来たのか、今はどうなっているのか、などの発想が乏しく、そういった人たちに対して生物多様性の観点を啓発するにはどうすればよいかが今後の課題ではないか。

湯本部長 ブラジルのアマゾンの食材を使って、和食やイタリアンを作るシェフを京都に招いたことがあるが、京都の料理人は生物多様性に対する視点をもっていなかった。何か仕掛けが必要である。また、農業政策とも絡めるべきである。

森 本 委 員 日本の生物多様性戦略には食に対する考えが入っていない。また、生物多様性の観点から言えば、品種改良等に際しては、遺伝子の保全を保証したうえで行われるべきである。この点からも、京野菜の生物多様性の視点は重要である。

- 湯本部長 生物多様性セミナーでも、そういった新しい視点を持った講師を探す必要がある。
- 板倉委員 深泥池において、ジュンサイが増えすぎて困っている。しかし、今は食べることもできず、廃棄している状態である。
- 湯本部長 過去にはジュンサイの減少が問題になり、一方で現在は保護が過ぎているなど、歴史的な経緯がある。国の天然記念物であるため、難しい問題である。
- 森本委員 文化庁の天然記念物については、保存管理計画が作られているが、サステナブルユースという発想がない。また、守るのであれば植生なども含めて管理する必要がある。
- 湯本部長 里山も同様であるが、囲っただけでは保全にならないということか。現行のプランにも食に関して書かれているが、生物多様性における食の重要性はあまり普及していないように感じる。
- 原口委員 来年から小学校の教育指導要領の中にも SDGs が入るようである。小学校が SDGs 中の生物多様性について指導する際に、自然観察会を行う機会は今後増えていくのではないか。
また、最近の学生は人との関わりを求めており、福祉やまちづくり関係に興味がある学生が多く、自然保護団体に若い人が入ってこない。小学生の頃から、自然と触れ、生物多様性の重要性を教育しておくことが大切である。
- 湯本部長 教育委員会との深い関わりが必要である。また、昔は関心のある学校の先生が自ら自然観察会に来ていたが、小学生や中学生の先生は多忙であり、時間がないのが実情である。
- 久山委員 SDGs は日本や京都からみたときに、馴染まないものが多く、教育に際しては、SDGs 京都版などオリジナリティを意識する必要があるのではないか。
- 湯本部長 SDGs に関していただいた御意見については、部会からの意見として京都市環境審議会において、報告していきたい。
- 菊池委員 生物多様性の概念を強調するのではなく、日常生活そのものが生物多様性に関わっていることを考えるための提示を工夫する必要がある。
- 湯本部長 京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度においても、例えばフタバアオイについて、現状は生息域外保全が多く、本来の生息地をどうしていくかというのがなかなか出てこない。
また、SDGs 京都版という話が出たが、京都らしいというのはやはり文化との関わりであり、京都を魅せるのに非常にわかりやすく、今後もこの方向性を持っていく必要がある。
- 板倉委員 今の小学生はどんぐりを食べられることを知らない。食の観点からアプローチするのはよいと考える。
- 湯本部長 教育委員会との調整が重要である。
それでは次に、京の生きものホットスポット調査について、事務局から説明をお願いする。
- 事務局 < 資料6に基づき説明 >
- 湯本部長 京都市の生物多様性を示す客観指標が重要である。その中で、ホットスポット調査と広域的な調査というものは重要なエビデンスとなる。農耕地の自然環境調査の実施場所について、事務局から大原と北嵯峨の提案があったがいかがか。

- 森 本 委 員 以前から花背や大原野森林公園において、環境省のモニタリングサイト 1000 の陸生鳥類の調査を実施している。
大原野森林公園については、重要な里地里山に選ばれており、現在、森の案内人により防鹿柵を設置するなどの活動が行われている。フクジュソウが咲いており、市内でそのような場所はなかなかないため、真剣に取り組まなければいけない。
- 湯 本 部 会 長 農耕地では、巨椋はかつて巨椋池があったため、特徴的であると思うが、調査対象としてはいかがか。
- 森 本 委 員 巨椋は伏見区と宇治市との境界になるが、広域的に調査をすべきである。過去にも本格的な調査を実施した結果が残っているはずである。
また、広域的な調査について、生物多様性に関する情報を扱うベンチャー企業と連携していくとよいのではないか。
- 事 務 局 どのような連携ができるか検討したい。また、環境省のモニタリングサイト 1000 の調査結果の提供についても確認する。
- 森 本 委 員 シチズンサイエンス（市民科学）に関して、大学等、専門家の調査に市民がボランティアで参加する「アースウォッチ」という取組がある。市民が専門家の調査に関わることで、新たな大きな意味が生まれる。そのような取組を検討すべきではないか。
- 菊 池 委 員 広域的な調査に当たり、市民の方に調査の意義や方法をしっかり理解してもらうことさえできれば、基礎データを収集することは可能である。以前行った北海道のセイヨウオオマルハナバチの調査では、行政や専門機関が市民と一緒に取り組めば大きな成果が得られることを実感した。専門性の高いホットスポット調査と市民参加による広域的な調査を実施する際、双方向的に実施することが理想である。
- 湯 本 部 会 長 先日、ある企業の方から、シマフクロウの鳴き声を A I による解析で個体数調査を行うことができるアプリを開発した話を聞いた。専門性が高い調査と市民参加による調査を結ぶところにこのようなテクノロジーを噛ませることで可能性が広がるのではないか。
- 事 務 局 農耕地調査の実施場所に巨椋を入れるということによいか。
- 森 本 委 員 巨椋池干拓地には様々な生きものが生息しており、重要な地域である。
また、宇治川のグランドの周辺にはノウルシが自生している。氾濫原としての重要な環境であることを京都市として押さえていくべきである。
- 久 山 委 員 ホットスポット調査地として東山が挙げられているが、具体的にどのあたりか。
- 事 務 局 データとしていただいているのは、都ホテルの裏側あたりの調査結果である。
- 久 山 委 員 将来的には調査地も考えないと全体像は見えてこないのではないか。
- 事 務 局 今後も引き続き、市民団体等が実施された調査結果を提供いただき、データを増やしていきたいと考えている。
- 湯 本 部 会 長 農耕地の調査については、大原、北嵯峨に加え、巨椋での調査をお願いする。
また、今後、調査地点を増やす検討もしてほしい。
- 最後に、資料 7 について、事務局から説明をお願いします。
- 事 務 局 < 資料 7 に基づき説明 >
- 森 本 委 員 鳥の調査を実施する場合、専門家の監修が不可欠である。ツバメについて、季節性があ

るため、どこにいたかというよりも、ダイナミックなツバメの動きを追えるとよいのではないか。そのため、この調査方法だけでは足りないのではないか。

湯本部長 ここで想定しているのは営巣場所である。最近では糞を落とすことを嫌がり、軒先のツバメの巣をつぶしてしまう人がある。ツバメについて理解を深めてもらうためにも、調査対象種に選定するとよいと考える。

板倉委員 ツバメにはコシアカツバメ、イワツバメ、ツバメなど種類がいるが、どの種を対象とするのか。

湯本部長 鳥の専門家の意見を聞いて、手法や対象種を選定していくべきであろう。

菊池委員 学校教育との連携も必要である。最初にツバメを見た日、巣作りを始めた日、巣が新しいものか古いものか、巣立ちの日、などを記録し、時間軸で観察できる仕組みを作してほしい。また、なぜツバメを調べるのかを参加者に分かってもらえるような手引きを作れるかが非常に重要である。単にツバメの見分け方のみを手引きに掲載してしまうと、ツバメは3種類いるのか、巣を作ったな、で終わってしまうため、ツバメの生活史が分かるような良い手引きを作成してほしい。

湯本部長 モチベーションに影響を与えるため、生活史を示したうえで、この部分を調査するということを提示できるとよいだろう。

久山委員 調査対象種として、カエルやサワガニなど、かつては身近にいた水辺の生きものがあってもよいのではないか。また、植物は非常に対象が多いため、例えば、環境指標生物であるウメノキゴケはいかがか。京都は温暖化以前に乾燥化が進んでおり、京都地方気象台によると霧が観測される日が減少している。水辺、湿潤性など従来の京都盆地の特徴を持つ場所が少なくなっているため、ウメノキゴケを対象とするのはよいのではないかと思う。対象種はどこで決定するのか。

事務局 本部会において決定したいと考えている。あまり対象種が多くなると取り組みにくくなるため、ある程度種を絞って実施したいと考えている。

湯本部長 まずは、システム作り。対象種は最初は少なくとも、どのようにして市民に参加してもらうかを考える必要があると思う。段階的に対象種を増やすなど調査の幅を広げていくとよいのではないか。

菊池委員 以前、子どもたちと実施した調査で、カエルの卵をポケモンのように泡タイプやひもタイプなどに分けて探しに行ったところ、非常に盛り上がった。きちんとした情報は与えつつ、やり方が面白い調査という考え方も必要だろう。

原口委員 写真を投稿すると自動的に地図上でどの場所で撮影したものかプロットされるアプリが開発されているため、活用するとよいだろう。データ集約も自動でできる。最近の大学生は、簡単にアプリを作ることができる能力があるため、IT系の学生コンペにお題を出すと良い成果が得られるのではないか。

菊池委員 継続することで重要なものになるということを示すことが大切である。市民の方の1回の調査が京都の生きものの歴史を書き写すことになるということを示すことができれば、参加者のモチベーションになる。毎年、各学校の4年生が調査を実施し、その結果を代々引き継ぐ仕組みができるとよいのではないか。

板倉委員 先日、位置情報を使用したアプリを活用した調査（自然観察会）に講師として参加したが、参加者の大半はシニア層であり、アプリを使いこなすことができず、結局、紙に調査結果を記録した。調査を実施する場合は、シニア層にも考慮した方法を考えていただきたい。

森 本 委 員 とにかくはじめてみるのが大切ではないか。

原 口 委 員 企業にも調査に協力してもらおうとよいのではないか。

森 本 委 員 K E S の取組としても考えてはどうか。現在，K E S に取り組まれている事業所でフジバカマを育成しているが，アサギマダラが飛来するとよく報告が寄せられる。

久 山 委 員 調査対象種として，外来種を入れてもよいのではないか。外来種については市民の関心も高い。また，高校の理科クラブへの働きかけも行っていきたい。

湯本部会長 広域的な自然環境調査は，最初は事務局の提案からはじめてみるとよいだろう。また，生物多様性保全の取組を進めるうえで，京都市動物園も重要な位置付けとして捉えるべきである。職員で唯一専門家も存在し，イベントなども多く，しっかり取り込んでいくべきである。

議題(3) その他

久 山 委 員 「京都の社寺と生物多様性」の外国語版について，すべてを翻訳すると時間も経費もかかるため，抜粋部分だけでも翻訳すべきではないか。観光税や企業の協賛の活用を検討してはどうか。

原 口 委 員 観光ガイドを行っている方に「京都の社寺と生物多様性」に関する研修を行えば，冊子を翻訳しなくても，生物多様性の視点でガイドを行うことができるようになるのではないか。

事 務 局 産業観光局等，関係機関とも連携し，検討させていただく。

1 2 : 0 0 終了